

環境問題シリーズ

第40章

講演「コスタリカを知れば希望が湧いてくる」報告

地球環境に学ぶサークル 伊藤 裕章

コスタリカという国をご存じですか？北海道の6割ほどの大きさで、人口518万人（2022年）という中米の小国です。ところが、日本に続き世界で2番目に「平和憲法」を制定して、今も「軍隊ゼロ」を堅持、消費電力の「再生エネルギー100%」という「環境先進国」でもあるのです。なぜそんな大胆な国づくりができたのか。国際ジャーナリストの伊藤千尋氏が5月15日、中央公民館で開かれた講演会「コスタリカを知れば希望が湧いてくる」（アジア研究会・地球環境に学ぶサークル共催）で、その秘密を熱く語られました。御著書『コスタリカ』（高文社）の内容も踏まえ、報告します。

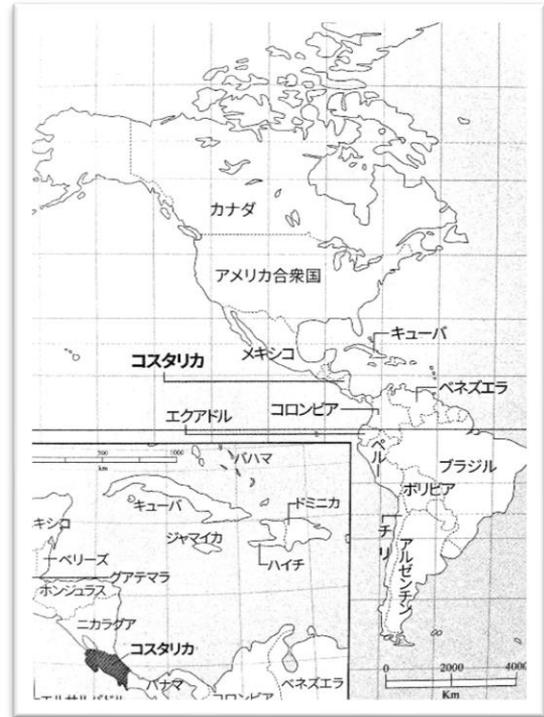


伊藤氏は元朝日新聞特派員で、これまでに80数カ国を訪れ、74歳の今も飛び回っておられます。コスタリカには10数回訪問されていて、『コスタリカ』は39冊の著書の1冊です。

伊藤氏によると、コスタリカは資源もなく輸出品はコーヒー豆くらい。内戦で実権を奪取したフィゲレス大統領が1949年、「貧しい国が発展するには、国家予算の30%を占める軍事費は教育に回すべきだ」として、「軍隊廃止」を盛り込んだ新憲法を制定。軍事費予算を教育や福祉に当てることで、幼稚園から高校までの学費を無料とし、医療保険制度の導入で医療費も無料とするなど、北欧並みの社会保障制度を実現しました。

軍隊なしで国を守るため、米国と米州諸国による集団安全保障条約に加わりましたが、米ソ対立が激化すると、米国はコスタリカに「ニカラグアの親

米派ゲリラが使える空港を国内に建設させてほしい」と要求し、「断れば経済支援を打ち切る」と迫りました。当時のモンヘ大統領は、欧州各国に水面下で了解を取り付け、米国を振り切る形で1983年に「永世積極的非武装中立」を宣言。米国と争うことなく、距離を置くことに成功しました。



同国はその後、外交に「平和の輸出」を掲げ、ニカラグア、エルサルバドル、グアテマラの3国に積極的に働きかけて内戦を終わらせ、南のパナマとハイチには、軍隊廃止を働きかけ、実現させました。1987年には当時のアリアス大統領がノーベル平和賞を受賞しています。国連が2013年に採択した武器貿易禁止条約や、2017年採択の核兵器禁止条約も、同国の提案や主導によるものです。

伊藤さんはその背景に「国内における民主主義や人権意識の徹底、さらに憲法の積極的な活用がある」と言います。伊藤さんが訪ねた学校

では、憲法や平和の授業があり、国家レベルの憲法や平和ではなく、「自分のために憲法をどう使うか」「個人の平和とはなにか」といった身近な個人の視点で議論されていたそうです。人権教育にも力を入れていて、小学校に入学すると、小学一年生が「人はだれも愛される権利を持っている」と教わると言います。

「民主主義とは何か？」 カード教材

1. 参加
2. 多様性
3. 寛容性
4. 対話
5. 連帯



「民主主義」も徹底しています。国会議員の選挙は完全比例代表制で、男女ほぼ同数になる仕組みを導入。2期連続の再選は禁止されているので、選挙のたびに、議員全員が入れ替わります。大統領も1期4年で、次に立候補できるのは8年後。任期は最大で2期8年です。

小学生も違憲訴訟する

小学校に入学してすぐに習うのは
**「誰もが愛される権利を
 持っている」**

憲法裁判所

年間に3万5千の違憲訴訟
 窓口は24時間、365日開く
 子どもの違憲訴訟が年間1750件

君が代訴訟がコスタリカだったら？




また、一般市民はもちろん、子どもでも法律が提案できます。小学生が「人魚に似たマナティーが減ってきているので、なんとか保護したい」と考え、国を象徴する花や鳥があることにヒントを得て、「マナティーを海洋動物の国の象徴にする」という法案を提出したところ、法律になったというのです。

また、コスタリカは自然保護に熱心な「環境先進国」としても知られています。乱伐で一時は国土の25%に減った森林面積を、植林活動を通じて50%以上に増やしました。国土の4分の1以上が、国立公園や自然保護区に指定されています。

ナマケモノ、イグアナ、「世界一美しい鳥」といわれるケツアールといった珍しい動物のほか、世界の蝶の種類の10%が生息するなど、貴重な動植物昆虫の宝庫です。自然環境や歴史文化を体験しつつ自然の保全をめざすという「エコツーリズム」は、この国で発祥しました。今も多くの人が世界中から訪れます。

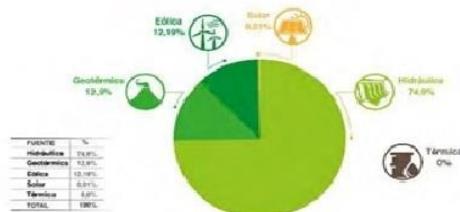


また「自然エネルギー大国」でもあります。2016年には国内消費電力について「再生可能エネルギー100%」を達成しました。内訳は75%が水力発電、13%が地熱発電、12%が風力発電。原子力発電所はゼロです。ちなみに、2位の地熱発電は、日本からの技術援助で設置されています。2019年には「2050年までに化石燃料の使用をやめ、温室効果ガスの排出をゼロにする」と、国レベルでは世界で初のゼロ宣言もしました。これは、自動車など

のガソリン使用までなくしてしまうという、極めて意欲的な宣言といえます。

再生可能エネルギー100%達成 (2016年7月)

Electricidad en julio 100% renovable



ただ、昔から環境先進国だったわけではありません。環境重視の政策に舵を切ったきっかけは「1949年制定の平和憲法にあった」というのが伊藤さんの見方です。朝鮮戦争下、米国が徴兵制を復活したため、平和主義者のクエーカー教徒44人が、コスタリカへの移住を決めました。この国がその直前に「軍隊廃止」を宣言していた、というのがその理由です。彼らは、自分たちの土地の3分の1を自然保護区にするなど、徹底した「環境重視の村づくり」をしました。ここに各国から生物学者が訪れて、さまざまな生物を発見。「自然保護の聖地」として注目されるようになりました。エコツーリズムで世界から人が集まるようになると、政府はこれに押されて、政策を環境重視に転換しました。伊藤さんは『平和の思想』が『環境保護』の考えを生んだ」といいます。

また、「歴史的に、資源もめばしい産業もなかったことが、民主主義や人権尊重、平和などの重視につながった」とも。この地域にきたスペイン人は、資源もなく、先住民も多くが病死したため、入植者自身が働かなくてはならなかった。大農場は生まれなかったが、格差も生まれず、「勤勉、助け合いの精神、平等を尊ぶ国民性が育まれた」というのです。

ただ近年は、グローバリズムの中で、コスタリカも多くの問題を抱えるようになりました。例えば、米国のインテルが進出しましたが、それにより所得格差が拡大、その後の撤退で、今度は多くの失業者が生まれたそうです。一方で、南米から陸路で米国への密入国をめざす難民が急増し、麻薬の流通経路ともなったため、犯罪も増えているそうです。

それでも伊藤さんは講演の最後に「平和は創造するもの。コスタリカにならって努力すれば、理想は実現できる。コスタリカをみれば希望が湧いてきます」と締めくくられました。確かに『コスタリカ』を読むと希望がわくように思います。ぜひ一読をお薦めします。